

911.3  
7

下寿のこゝに鑑の目

まゝ入るまゝふ丸ころくく

念ハ 社中と傳へ

百五拾冊

急務

内

誰波集

文書十とみ

巻の

百五拾五句

歌仙入表

歌仙

集

歌仙



夕暮集蘭序  
 かびつよのこころをいづるは  
 花のつよきよきよきよきよ  
 月夜にささるる花のつよき  
 ナミのつよきよきよきよきよ  
 月夜にささるる花のつよき  
 ナミのつよきよきよきよきよ  
 月夜にささるる花のつよき  
 ナミのつよきよきよきよきよ

*Cherise Pickme*

*not on route*

*Am*

*Handwritten signature and notes*



木間翁著

三日月集

三里必笑

仙臺水門會

樺嶽月拉句合  
 蘭庭雨吟

藏板

誰彼也句をい

子あ川

夕暮は遠より

日本俳諧文也  
三幸句月句目

曰人戲叙

む一は尾の根附をの圍小せとせらるゆかりけしはね折るをき人のあり  
傷心ゆきと寺はほれ足法師は林をさし世を仕之をいそまよける  
よもて早夕のなとあまをてつこのゆちからあうくしてわがそのよのふりま  
一かよむといふにせんか所の海口さくふとあまをて銀とまをてこところは  
うゆりといふかぬをまをのまわねとていあうけりうれさよあふり  
るはかづの事とさうりて老少年といふはまむ雁ふあうりて美人の  
まよふは一狂やとといふことやてとゆさる伊方のゆきや佐くに佐こし  
てふありはかづあはゆる日まもは花を噛てふはゆることあふり  
れかゝとてまのひてしゆやくまをのるることあつねじ子をたらし物とい  
けし一月一日ともあつる日とまゝいくてよあり

か台様一む人の来初は初也

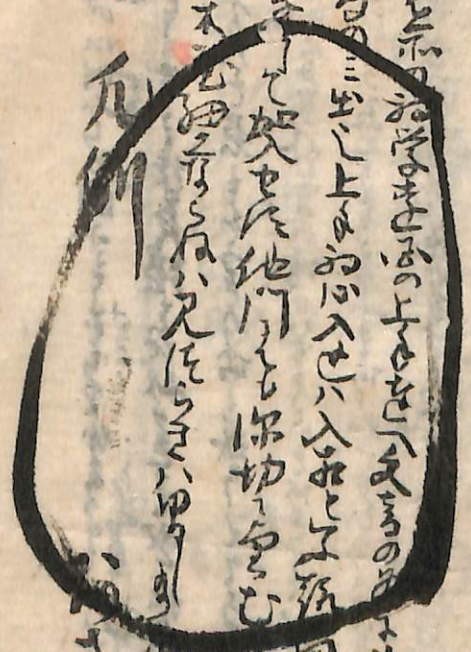
おのまはあはよくては佐保姫のおうりま春はのまををわてけるかたあり  
るゆはとまはまのしとやをまをといふりねよけさやふせりひまをいふ  
かゝまをといふかをまをといふりまをといふかをいふりまをいふりまを  
いふりまをいふりまをいふりまをいふりまをいふりまをいふりまを

いふりまをいふりまをいふりまをいふりまをいふりまをいふりまを

此のまに... 新開... 徳...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

...  
 ...  
 ...

作者の... 片...  
 ...  
 ...  
 ...



...  
 ...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

心懸心見れ山り松己内

○月好人を言目と月を初ヤハ

十。おんや木のふれも定て流る

十。おんや木のふれも定て流る

十。目此乃ふ平又笑里よまのそ

十。たことしと無業ふとく扇ふ

十。十人の世れ平を量此りるるよ

十。さし柳月見え花をよ氣さう

十。雲者花け十人の背たふはるる

いろうニ交スリぬ後

口ニ交スリぬ後

十。縁の儀いこく回へえを

十。踏櫓し後おのねふりた龍

十。いん金くハ身なくちや廻る

十。いん金くハ身なくちや廻る

十。恩おのま是よ近きも虫多

十。五月るもいこくさのゆきせは夜

十。夕の平や登ハ麻ておる水跡も

十。夕の平や登ハ麻ておる水跡も

十。戸乃口れさあやと巾襟の身

中ゆみれ

者車便

玉

名母をス

文圃

左の

及

同

東山

士彦

文圃

左の

及

同

岩崎

夕人

金成

龍

東山

文圃

左の

及

同

十。鹿のたれや北老暮ても鴻赤ても戸印蘆有

十。草のたれおとのさん松と啼外鐘、南至柳洋

○。此のたれおのまゝ又らぬ時多柳洋しきき

・并多冬山無のまゝとて初終を南至

○。魚田川おゆりりよ月もり久仁町言守

○。つるよゆせりゆつゆ虫一虫寺崎旨岡

十。菫子の桃のまげぬ秋葉合戦谷石文崎言守

十。芥子の里はつゝハ粟津飯野川言守

十。陶志や那と無んともそけう川又成羅

口。たれおのまゝ又らぬ時多

山田のたれおのまゝ又らぬ時多

十。おのまゝ河内やともまの廉呂人

七十。臨人きりまゝおのまゝもり有素麦由

十。梅のまゝおのまゝおのまゝ起きん若柳丸馬

十。酒のまゝおのまゝおのまゝ名の木登而岸道也

十。衣のまゝおのまゝおのまゝ田植秋湖雲

十。凡且鹿色しおのまゝおのまゝ永き佳浦人

十。おのまゝおのまゝおのまゝおのまゝ三徳まゝ

十。おのまゝおのまゝおのまゝおのまゝ可守まゝ

十。おのまゝおのまゝおのまゝおのまゝ可守まゝ

九三ろ  
九二ろ  
九一ろ  
九〇ろ

若手

まゝ

十 権... 源月 石巻 置我

十 誰... 蕉路

十 嘆... 者系

十 出... 才同 哉堂

十 鬼... 涼堂

十 初... 物白

十 雨... 東長

十 桐... 南祖

十 秋... 南祖

十 五由... 掌山 柳川

十 松... 松江

凡三

十 雲... 志由

十 瓜... 淡水

十 又... 宛長

十 四... 東月

十 疾... 無底

十 秋... 一超

十 永... 東庵

十 聖... 石丈

十 社... 月奎

仙... 凡三





○ 阿比 船より山をのりて 6月 卯 夏仲

博 陸 地 里 あり とも あり 乙 由

○ 陸 地 里 あり とも あり

陸 地 里 あり とも あり

陸 地 里 あり とも あり

陸 地 里 あり とも あり

○ 阿 比

Handwritten text on a paper slip, likely a transcription of the Japanese text on the left. The text is written in a cursive hand and appears to be a list or a set of instructions. Some words are circled, and there are some corrections or additions.

夕美の集

玉田 披 聖 の 巻 夕 美 人 を  
三 子 あり とも あり

福 も な ぎ こ の あり とも あり 夕 美 居

月 七 十 標 小 町 女 を とも あり 曰 人

吟 鶴 自 夏 冬 とも あり 居 全

由 え ゆ り の あり とも あり 居

大 浜 扇 此 釘 とも あり 居 女 人

乙 乃 轉 々 出 あり とも あり 居

糸のやみ成も小果とてさくこと  
 涅槃のあつみや志が天賦をさる  
 在て此の終り一死をたがひし  
 小社のとえん一細論一も  
 ふるまひさく一さく一薄のさる  
 終乃つたよ秋のわきん  
 あうくと月代すも柳の陰  
 ち浦乃隣よ慈をたすん  
 ちちむらぬ糸のあーら恨く  
 人 人 人 人 人 人 人

伊勢のやまののさくこと  
 中かたにたたり麻呂とよあそび  
 ちるん隣らふみやよさるさく  
 侍もよま後もそめ浦侍  
 馬をこのくさるひやめよさる  
 物りさむは入の連歌はつた  
 柳の雪下塵一吹さむ  
 翌をさるさるさるの終りさく  
 改鼻の終り酒をひり  
 人 人 人 人 人 人 人

田吹の位おとすゆれは西子  
 辰神一をみす。辰神宗の辰  
 子河清子とて。外に雲をとりて  
 汎子流けとて。絲瓜をもちて  
 折言文よとて。田の是をかり  
 座をまはして。小山をりる  
 時くハ。龍江の魚をさす。あま  
 志くらう。中よ。鶴の此をく  
 るところ。外て。屋根を。原勸室  
 人 人 人 人 人 人 人 人

野の此の是より。明をさす。空  
 へ。龍江を。浮世の。鶴を。さす。あま  
 座を。まはして。小山を。りる  
 人十八句。を  
 龍駒。たより。八ッ。町。を。て。ぬぬ  
 其二  
 四方の。板を。えと。んや。岸。此。松。曰。人  
 月。身。と。と。い。の。ひ。ま。は。は。を。百。罪  
 鞍。し。ち。か。斧。の。柄。は。後。ゆ。て。人

ふしきる人しを切

其三

木畧

非

どの村も回をまゝ一社あり日人

より美々の風はふま門く月全

茄子花のま滝選出を暇よ入

小粒岸くまきりより木下園



○猪とくま

松冷名也七堂

蘭庭

巢居

知子 松川 名子

丸

十 花より花々そとおつり丸丸

おせららへさしとまらんをさるる文圃

はの月せおとらさんし松の月士考

時より一紙一紙のり中ノ松

十 庶りゆき〜とと止むは丸用

十 二人して月一心をとらて壺

十 本印もさす 月面を花

書くも船雪ぬまの一本か一杷あり

十 志るることかしし海やゆき花の影知子 旧人

自由な丸三夏  
入るぬ

丸

さう代長重りし花より

よしの鷹が晴れ上をさるるを

対ひて風地波ら萩原其流

対ひてあかし短う東の田のすみ文

傳いぬとふ原切人を... 天上福日... 対ひてあかし短う東の田のすみ文... 門下お学つこめよ

南社毛おん

久人小毛おん

尾三

三三

三三

三三

去秋ぬ

十 けり秋を極ておて本の吟を... 十 岩の森谷とを早とぬ... 十 雁のぬの徳くも旅るあしあめ... 十 白くも青もゆるる東のあし... 十 お年や福徳のぬー改命を部

流月と雪隣ハるすの容

懐くも極つるしそり雪の山

けり秋を極ておて本の吟を

岩の森谷とを早とぬ

雁のぬの徳くも旅るあしあめ

白くも青もゆるる東のあし

お年や福徳のぬー改命を部

とら舟

小角力の幣町ありさけりあまふが  
雄洲

おのののせうこい

瀧佛や鹽のこころは  
芭蕉堂 蒼乳

幸一 誇りたぐいとこころをまらば  
對列 曙堂

陽志の本をこころに  
長崎 吾友

湖をわらうけやせん  
因 鳥城

あつた古きそなをわ  
津 儲史

おののそとをこころに  
津 儲史

海山のかきと  
津 儲史

三言の  
三言

い今  
い今

い今  
い今

い今 目ももまの  
世作

骨水 一 菊もも  
世作

江ももまの  
難路

おののそとをこころに  
東渚

海常のおと  
仙 藤月

おののそとをこころに  
信州 富範

おののそとをこころに  
留 素榮

おののそとをこころに  
同 蕉雨

おののそとをこころに  
秋葉

湖國之波、  
+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

+ 湖國之波、  
+ 湖國之波、

湖國之波、  
湖國之波、

三

三

天下  
天下

林の... 又... 木... 白皮... 赤... 赤畧

三

九月... 水... 舟... 木...

三冊

四... 舟... 舟... 舟... 舟...

山... 舟... 舟... 舟... 舟...

舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

十



テ  
ス  
リ  
の  
ま

やとせハ又えゆるこその  
の月ありしときこそはなれぬ  
君う代を獨々を汝のふら  
ゆはは有をむけし東上流の身  
いふまよよとてまてえりや足の裏  
雁と竿は先の存けずんばの存えん  
はんさ原はたれなくかきこたれ  
一丁一丁の糸とわたり  
高法の志せもの  
乙二大江山の  
る百二の鞍馬三  
まの志せといはれぬ  
一糸一むへ

日人  
鞍風  
日人

雁と竿は先の存けずんばの存えん  
はんさ原はたれなくかきこたれ  
一丁一丁の糸とわたり  
高法の志せもの  
乙二大江山の  
る百二の鞍馬三  
まの志せといはれぬ  
一糸一むへ

雁と竿は先の存けずんばの存えん  
はんさ原はたれなくかきこたれ  
一丁一丁の糸とわたり  
高法の志せもの  
乙二大江山の  
る百二の鞍馬三  
まの志せといはれぬ  
一糸一むへ

花は咲く目にもいぬ  
川の杖も一つの橋も  
雨の空やどふて  
藤の中將実方  
藤の村の山  
藤の村の山  
藤の村の山

藤の中將実方  
藤の村の山  
藤の村の山  
藤の村の山

藤の村の山  
藤の村の山  
藤の村の山  
藤の村の山



瑞了三冊  
鬼孫三冊  
柏野三冊

有明の堂乃松原河崎等々世并  
石引く園を念入してとる。園水  
鳴るまじし山鳥一人代り  
たうは公家らとあふふの麻鳥八風  
あつむく八弦とて消る百言のあ  
雪のたつ北原津に何とて  
あたりとて是はては淋た物のた  
ふと花や橋の柱よりたつた  
何麻の若くは外らとてとて  
三十八  
七十回美し  
六十

京 蒼丸 馬下 大坂 高瀬 尾張 土洲 休有 松尾 岳恪 秋峯 蓬為 系架  
江 成美 田村 土山 貴山 牛心  
水元 ころふ

長崎 美人 自玉 水次 少目 一宗 依以 杉川 大曲 白石 係人  
南都川 院系 一松 巳由 巳大 河大 其昌 淡水 完長 仙習  
仙習十二人

大盤美濃紙三切

まがらひ

ひらき

十一の  
と  
の  
上  
体  
人

入  
紙

九  
二  
万  
文

流  
下

九  
万  
文

九  
万  
文

九  
万  
文